Japanese Association for Religious Studies

合うことが必要とされている。例えば移民や二世の女性たちと、現在の仏教会のメンバーとはジェンダーの意識がかなり異なっている。BCAをひとつのケースとして仏教婦人会の歴史的経緯と、そしてさまざまな最近の動きをみてきたが、アメリカの仏教界では僧侶や教団や組織ではなく、メンバーが自発的に、彼ら彼女らのジェンダー意識に則した形で変化が起きている。仏教会が世襲制ではないことや、アメリカならではのメンバーと仏教会の関係性などをふまえて、内部から少しずつ変わっていく姿がみられる。

聖公会における司祭職の再検討
――女性の司祭叙任をめぐって――

香山洋人

一九八〇年台後半から顕在化した日本聖公会における女性の司祭叙任実現を求める運動は、「ジェンダー平等」を中心とした教会改革運動だった。教会内の女性差別事象を機に女性信徒たちが運動の主体となり、総会、総会立の委員会へとその運動は展開した。一方この時期、教会全体として戦争責任やマイノリティー差別の自覚、人権問題への取り組みなどを通した自己改革への道をたどっていた。女性の司祭叙任は一九九八年に実現するが、この過程は、これらの流れが相互に影響を与えながら形成されたものであった。しかし女性が司祭となることが目標だったのではない。本来この運動が目標としたマイノリティーと連帯する教会への自己改革のためには、女性の司祭叙任を阻んできた神学、男性司祭主義そのものが克服される必要がある。男性司祭主義は家父長主義的キリスト教の一形態だが、日本聖公会はそれを英米教会から受け継ぐことで日本古来の家父長主義を承認、キリスト教のそれとを合体させ、ジェンダー不平等の価値観を維持、再生産してきた。こうした体質に変革を迫り、差別を克服してマイノリティーの解放に向けた連帯を目指す教会への変革は、既存の教会理解、信仰そのものを問う運動でなければならなかった。しかし、運動にかかわった個人、特に男性たちにそうした自覚は不十分だった。英国教会では、女性の司祭叙任を議論する過程で男性による論文集が出されたが、その主題は性差別の悔い改めと償いだった。しかし日本では男性司祭や主教によるこうした発言はみられなかった。

男性司祭主義を克服した教会は、「パートナーシップ教会論」を必要としている。これは「神の宣教の神学」「神の民の神学」に基づくものであり、この間、女性信徒の運動が実践してきたものでもある。司祭としての女性たちの経験は司祭職の再解釈をもたらした。独裁的な権力者ではなく有形無形の「マイノリティーコミュニティ」の形成と被差別者の「エンパワメント」に奉仕する職務。自らの抑圧性と被抑圧性、差別性と被差別性の自覚に立つ司祭職。単一でマチスモ的権威ではなく重層的で多様なアイデンティティを自覚し、その「はざま」を生き抜く知恵と感性を備えた司祭職だ。初代教会、少なくともイエス運動は「マイノリティーコミュニティ」として被差別者たちをエンパワーしてきたはずであり、イエス自身が弱さと破れにおい

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

て民衆と出会っていたところにキリスト教の原点がある。「弱さ」「傷つきやすさ」において解放への同伴者となりうる新たな司祭職理解は、男性司祭主義の克服、家父長的キリスト教克服のための重要な課題であり、これはキリスト教の内部の問題だけではなく、他の宗教や様々な運動体のネットワークに支えられながら取り組まれる課題といえるだろう。

女性聖職者の按手をめぐって
――在日大韓基督教会の事例――

李　恩子

本発表は戦前の在日朝鮮人社会（戦前は朝鮮半島が分断されていなかったため南北の総称として用いる）で唯一設立された基督教宗教団体である現在日大韓基督教会（Korean Christian Church in Japan　以下KCCJと記す）の歴史とその特性を概観し、教団内における女性牧師・女性長老の按手をめぐる時代的制約と女性たちの貢献を検証する。検証する大きな枠組みはエスニシティとジャンダーの交差する視点である。言い換えれば「民族解放」と「女性解放」の緊張関係である。この二つの概念はKCCJの歴史において、同質の重みとして捉え実践されてきたのだろうか？　あるいは相反するものとしてあったのか？　あるいは、相互に拮抗しながらも互いに影響し合っていたのだろうか？　この議論を展開するために、女性牧師・長老按手の案件がいくたびも浮上しては挫折した一九七〇年代の教団内外の「民族」にまつわる人権運動と教団内の女性たちの役割、働きをまず素描する。そして、女性牧師輩出に至らせた背景と要因を探り分析する。具体的な方法としては、当時発刊された、教団女性の機関紙コゲ（峠）の中に現れる教団女性たちの声、つまり、教団女性の活動として、また、一人の女性として教団に、社会に何を求めていたのかを考察し整理するなかで、女性たちの主体回復と教団変革への参加の道を結論として描き出そうとするものである。

パネルの主旨とまとめ

川橋範子・小松加代子

本パネルでは、教団の内部にも場を持つ研究者たちが、宗教研究にジェンダーの視座を導入することにより、女性の宗教的主体の構築とその解釈のあり方を考察する。宗教に信者として参加する女性が多い反面、聖公会の「男性司祭主義」、仏教教団における女性の従属化など、宗教における女性の周辺化は顕著である。現在、女性たちは教団内外で改革を求めさまざまな運動を行っている。宗教活動に従事する者たちの価値体系の形成は、教団内の孤立した環境で行われるのではなく、教団外部を含む多様なネットワークによって影響を受け、変化を遂げる。本パネルは、正統的な宗教の権威から排除されてきた女性の宗教的主体性の問いを再検討し、女性たちが、どのようなネットワークを構築し、どのような規範を受け止め、どのような

NII-Electronic Library Service